

論文 / 著書情報  
Article / Book Information

題目(和文)	大学生向けの対人問題解決力指導法及びシミュレーション教材の開発と転移に着目した効果の検証
Title(English)	
著者(和文)	岡田佳子
Author(English)	Yoshiko Okada
出典(和文)	学位:博士(学術), 学位授与機関:東京科学大学, 報告番号:甲第393号, 授与年月日:2025年3月26日, 学位の種別:課程博士, 審査員:松田 稔樹,室田 真男,永岑 光恵,佐藤 礼子,弓山 達也
Citation(English)	Degree:Doctor (Academic), Conferring organization: Institute of Science Tokyo, Report number:甲第393号, Conferred date:2025/3/26, Degree Type:Course doctor, Examiner:,,,,
学位種別(和文)	博士論文
Category(English)	Doctoral Thesis
種別(和文)	審査の要旨
Type(English)	Exam Summary

(博士課程)

## 論文審査の要旨及び審査員

報告番号	甲第	号	学位申請者氏名	岡田佳子	
論文審査 審査員		氏名	職名	氏名	職名
	主査	松田稔樹	教授	弓山達也	教授
	審査員	室田真男	教授		
		永岑光恵	教授		
	佐藤礼子	教授			

### 論文審査の要旨 (2000 字程度)

本論文は、「大学生向けの対人問題解決力指導法及びシミュレーション教材の開発と転移に着目した効果の検証」と題し、全7章で構成されている。

第1章「研究の背景と目的」では、社会的コンピテンス、ソーシャルスキルトレーニング、社会的問題解決の情報処理モデル、問題解決療法など、対人問題解決力の育成に関する先行研究を横断的にレビューし、学習成果の転移に課題があること、また、新たに学習科学の成果を取り入れ、メタ認知の指導を行うべきだと指摘している。その上で、本研究の目的は、大学生を対象に対人問題解決力を育成する指導法及び教材を開発し、転移に着目してその効果を評価することだとしている。

第2章「大学生の対人問題解決力育成のための縦糸・横糸モデルの定義」では、メタ認知知識としてモデルを明示し、それを基準にメタ認知技能を働かせるように指導することを提案し、大学生の対人問題解決力育成のための縦糸・横糸モデルを定義している。モデルでは、実践の場となる「人間関係論」の授業でこれまで指導していたスキルや知識を問題解決の手順に対応づけ、どこでどう活用すべきかを明示している。また、各過程のアウトプットを意識し、知識等を活用するためのヒントとなる見方・考え方について、情動的な見方・考え方を参考に整理し、明確化している。

第3章「メタ認知知識の指導に焦点をあてた人間関係論のカリキュラム再設計」では、第2章のモデルに即した指導を進めるために、「人間関係論」のカリキュラムを再設計している。講義でメタ認知知識を指導した後、授業時間外に第5章で開発するシミュレーション教材に取り組みせ、その活用を個別にコーチングする。また、最後の3回の授業は、メタ認知知識の定着とメタ認知技能の活用を促す総合演習を行う。その際、モデルの定着とそれに則した思考の演習を支援するために、授業全体を通じて、思考をガイドするワークシートを提供し活用している。

第4章「典型事例としての対人葛藤場面の特定と問題のパターン分け」では、96名の大学生を対象に対人葛藤場面の調査を行い、多くの大学生が経験する典型的な対人葛藤場面を特定している。回答に基づき、相手との関係性、相手の年齢、交渉のポジションという3つの文脈要因の組み合わせで場面をパターン分けし、講義やシミュレーション教材で使用する場面を複数作成している。

第5章「メタ認知技能を指導するための教材の開発と学習効果の検討」では、メタ認知技能の活用を指導するためのe-learning型シミュレーション教材を異なる場面設定で2つ作成している。問題解決に必要な知識・技能の修得について、「レベル1：モデルに関する知識が定着している」、「レベル2：問題解決の中でメタ認知知識を使って意識的にメタ認知技能を働かせられる」という2段階を仮定し、教材内の問いを25項目作成している。教材は、「i)対人問題解決場面の提示、ii)各過程のアウトプットの記述、iii)対話形式による思考プロセスのふりかえり」という構成である。iii)の対話では、問いによってモデルと自己の思考過程を対比しながらモニタリングさせ、選択した回答に応じて異なるフィードバックを与えることでコントロールを促す設計としている。2020年度に人間関係論を履修した学生99名に教材を実施した結果、教材の対話方略によってメタ認知技能の活用が促されたことが確認できたが、前提となるメタ認知知識の定着が不十分な学生の存在も明らかになった。そこで、新たにメタ認知知識の定着を促す復習教材を追加し、2021年度に人間関係論を履修した学生124名に復習教材→教材1→教材2の順で実施している。結果より、復習教材は汎用的な手順に関する知識の定着に効果があったが、見方・考え方の修得には課題が残ったとしている。

第6章「転移を評価するための教材の開発と転移効果の検討」では、モデルに基づく指導の効果を転移に着目して評価する手法を開発し、実践している。ここでの転移とは、「講義で扱った場面とは異なる新しい対人問題解決場面で、モデルに則して考えられること」と定義し、学習者の思考プロセスを評価するために、e-learning型シミュレーション教材を用いて問題解決過程を記録する方法を採用した。教材の支援なしにモデルに則して問題解決できるかを評価するために、手順を示し

たり、フィードバックを与えたりはせず、選択肢によって分岐する設計とした。2022年度に人間関係論を履修した127名から任意参加の38名の協力者を得て、講義終了2～3か月後に当該教材を実施した。結果より、38名中13名(34%)が転移したと判断された。転移しなかった学生の躰きを分析し、問題解決の各過程が何をする過程で何がアウトプットかを十分理解できていない、見方・考え方を意識的に活用できていない、合理的判断過程を飛ばしているという特徴を抽出している。

第7章「総合的な考察と今後の展望」では、本研究で得られた成果と明らかになった課題を考察し、転移を可能にする指導法と転移効果を評価する方法の具体的な改善方針を示している。

以上を要するに、本論文は、対人問題解決力の育成で課題になってきた学習成果の転移を促すために、メタ認知を促す働きかけやe-learning型シミュレーション教材によるコーチング手法など、学習科学や教育工学の成果を取り入れた新たな解決手法を提案・実践し、その効果を検証したものであり、当該各分野の深化・発展に寄与するところが大きい。よって本論文は博士(学術)の学位論文として十分価値があるものと認められる。

注意:「論文審査の要旨及び審査員」は、東京科学大学リサーチリポジトリ(T2R2)にてインターネット公表されますので、公表可能な範囲の内容で作成してください。